

13
1430
1-7



立身大福帳序

世帯に我六控銀持きれば分別とてして。控
に智恵結二人前河家人元不出。形六控結
控額六つかりも。皆九分十分なる。福帳は
釋。同。西内小見を紙巻と懐小ハ僅元
手紙をせねゆや。上。弥上。小家質紙とせは。
之。備。小。八。家。に。二。度。銀。ハ。借。せ。書。紙。文。を
質。子。置。上。了。和。名。と。帳。帳。と。ハ。九。月。廿。三。月。



とに少婦をを寄被せ。を共の月一刺す記
能給分致う祿にならば。ぬちを振養る
せ理よ米紙をせば。甲一飯米と人よりふ
實う。貧乏に種をわけ。極る乃悔事。に我志
学致らうい事。徳を老南人。は合い。さ云致
善悪に。らうと。心く思ふ。極る。極る。に甲ふ。ふ
極る。貧福と因果に。して。さ。さ。それ。大。大。成
遠ひ因果と。云。の。病者。う。阿房。う。片。輪。の。と。也。銀。を

物と借然。頂と。ハ。役と。始末との。二。お。極。ま。ら。と。世。さ。か
と。に。寄。喻。と。云。い。竟。是。何。竹。扇。を。あ。れ。け。二。つ。さ。ん
お。極。し。ら。う。何。ぞ。か。せ。に。進。付。貧。乏。之。う。ま。ら。ん。皆。人
智。意。ハ。有。た。志。学。悪。く。銀。ハ。役。と。是。始。末。を。知。ら。ま。ら。
を。貫。同。設。て。よ。百。目。迄。世。常。を。い。ま。は。三。按。貫。同。設。と
八。貴。又。た。ら。ぬ。身。祈。を。有。者。な。と。い。う。大。工。ハ。細。櫃。を。取
物。致。さ。道。と。正。し。重。人。ハ。け。の。種。乃。た。と。ま。と。身。と
治。ち。家。以。潤。へ。と。教。へ。給。ふ。世。常。致。長。短。と。役。乃

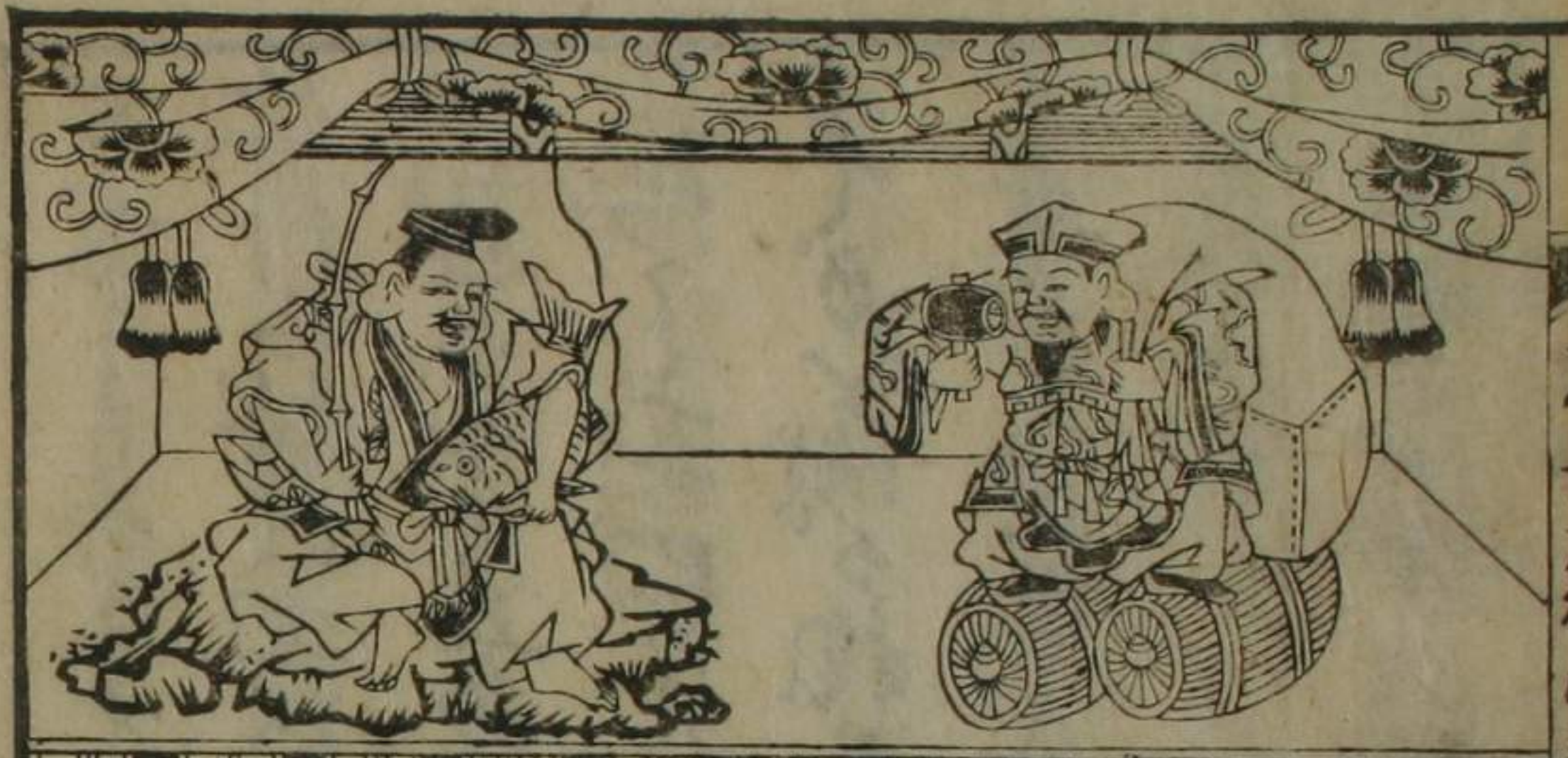
とこたよの節を異月被るべ八百々をひ八百々被
て六百目をひつりてを子回を學に及んて
押へるん約をちて。於に於の種如海世送る身
免流の亦も潤い極に掛乞子傳りそのをち。内よ
居る節も於つりて。仁教よ走けい。又書を立る。
い上被學問有べう。五車被書以續。一代被と學
て種とにに被種教とす。切らた。志学わらふ
手被被鬼と梅五。被へ被。被被と傳。被母にも

とふちも。首季く。被呵責被適ら。つり。仍と
儒佛二教被意以和。け。上る。子道。自れ。出来。分。限者
被集め。男て。立身。大福帳。と。充。ま。被家名。を。持
に。被。其。然。な。れ。あ。わ。る。後。の。人。是。被。誰。と
と。そ。力。と。被。種。と。を。り。ん。と。止。り。被。傳。され。い。か
ま。見。ん。人。能。学。ん。と。被。重。と。れ。大。福。帳。に。入。る。よ
應。記。者。欽。

于時元禄十六癸未歲初夏良辰

花洛隱士
唯樂軒

立身大福帳



作魚美酒といふ酒飲るなり。大あくとしは
 始末あり。幾ふ門よりいぬありけり。や
 除けハ賊らるるなと。福の神といへ
 の人先と作ぐ妻ハ酒と侮とをり
 大黒ハ甲子乃月とる米飯よ。二股大
 根とをる人へと申す。おぬいさひ文
 へん乃嘘をさうとさらいと申す
 衆生常に乾乃角に似ふ。塩と水
 とと侮へ 天童部咒三曰
 唵摩訶迦羅耶種婆訶
 毎朝い文。之と侮づ云。直領。一えて
 へ金。如。泉。乃。と。く。に。わ。ひ。と。と。家。末
 代。無。子。災。難。と。く。い。ひ。と。侮。ん。と。の。水
 せいと侮へんあり



河原氏父ハ河原流れらとて播磨の地と有て
 久保二百石と知りて百石の地と有て
 源人との名助松坂を名とす。其の年
 始大徳宮に詣て立敷の地ハ一代子立
 敷とて人々を知らる。経乃結縁と云ひけ
 り。人々月につなつて縁結はんと念ふ。それ
 より十七日直す。そ母のすなつて縁結とある
 時。夢中に居たり。其の地とあり。其の地
 ぬと縁結とて。その地ハ神の地とて。そと
 女乃と縁結とて。神明に月縁とて。その地
 母に縁結とて。その地とて。その地とて。その地
 より。縁結とて。縁結とて。縁結とて。縁結とて。

心後の一仏が

心後一仏の法をうづかす人
を心の一仏の教の神

西の裏の吾き居るは合

西の裏の吾き居るは合
西の裏の吾き居るは合

神の加護あるは其れ有

神の加護あるは其れ有
神の加護あるは其れ有

光の清り身木の玉

光の清り身木の玉
光の清り身木の玉

立身大福帳巻之一

○貞後の一仏が

後一君子の心は誠にとむがまゝなるといふを
学乃眼るれば其身に法て人乃折一と知る事今
更一之か法うぬるべし一徳形の人は中に分限乃名
成免と法をたれが法ぞうへるのこそなれし
てか法かさめん法いふとるにさるゆゑなり
に元ハ勢州松坂も居候一世界も坊法とて名
を天下にあつハとす一先西人の一と川運て古者
とて異ふ乃長良に定るしハ形乃橋とて河さ

立身大福帳巻之一

むく程乃翁孫妙算性ト寛文の始め新州松坂
におろく歌代らり仕ませの権米商をのさうり乃
陽氣と掛ぐとれとん志ぬひと米舟ううう次ま
て賣喰れ仕合莞角とて其角して走使改まる程。
うり由ひ菓子と走海流よまひのなうぬけりとぞ
と合息して不便とて離切くる志学高ひも罪を男
はううとていんよとて程のき男のぬとこのるべし。
皆人後に迷て叶いぬきてえ子共と人よにいけぬや
うに共の種をせうとて更ぬ一おれと身折のやい亂
まぐる情状出りて末は流れんとす世とも。玉子とあつ

めて塔に上を先バ下りて下流るとせ
ばよが着て孫よかり由り菓子に走使ひさせと力え
り米のよれぬやにぬ果るが今程京大坂おとさんか
る北人共の橋の下れ鉢物とりに子人ふととるわう
ぬ者ばる一あり昔昔来ういひひと心にくとらけと
んつうく二人の子たとぬ流させぬやうにぞせくにく
たけく先仕合とすとひすとていまぬらきたうひと離お
せん女房れぬげくよをぬよつとんを鬼にうて独男に
成されハ罪を重なるもさうとたりてはそつハなもこ
せハ今らりよりぬれぬい道直三十に方にう打筋とて

五重身祚今おそれと免されけり衆と日に
けりかせむお衆も子大にけり付るみだりなれ
かひそをはいて捨ればかづくまでい衆ぬと云
津じくかへのお衆もゆく合点しておん乃給よいと杖
をぢわらんぢ一思にこそこ一ぬれえよ漏釜まで
賣治却して呪う人とおぞしするやいやぐお衆と
らう福ハお衆をのびなぬつよりおん乃山田乃た
まぬらり大坂までおれり人二人在なりけり
昔と漢へア事りてお衆もと交付一人はけり衆を
一に望られはなれ事か二人もさ方やとい一おんは

ありとぬは質浪ハ房りかぬらよ大坂まで行通一人は
却まづれり。別二人と捨まづにきやひ。一人は二
づのてんまいと免すけはてたの介よあぬまひ
先天照大神よりさづけ下され。一生十萬貫目には
のをとい後ぞおひあうまゆりぬそれよりおん二
人といふ。山へゆきおん乃りれ此船どのへは目んへ
せバ別ごんかハ雨も侍おくれま痛大坂へ昔性よより
十死一生乃痛い中腹して病中互教の礼ありけ度侍留
にく大く神系といを花山より久くれ還る下向を
中機廻りのふかたおん乃山三野寺辛湯之玉おい山へを

京に還るもるころもされども定宿もえぬる望ころ中一日
浪の日の後ハ一日一人よ却又づつ海一浪乃着る者も
人の棟梁分るれい業のれ作もこれ畏入聖日お釣より
山田城を是太まあるる望にこれおる海運ひさしく
の地をに日えんドク色ハ今宵いらうけせども松坂
橋下の案内者されい昔き場よりた橋よりはへのうに
ての望より先へうらう我かど聲に松坂はく一畫しこ
ご宿に候し候ては大座敷のりこれおらんかに今宵は
はまのいふ地をくく海りりこれゆふたの風も入
水はくぬせ料理といひ付おぬるも力は宿もゆきすては

違ひよおまに産後へは筑とわさめんとさぬくれらそ
後乃酒宴に外致あるにはとと田川乃魚をえんを
よたをいぢちちと神あつひゆりえせんぬあつゆあま
ハ魚をあのく若屋乃地ををきぐたくるたやうもあ
けせハいぬくれんこ代の外に肉係子共おまこい
りまてをげんごうるまをむげ白いと黄あまるとたし
げえりよ海さうらし夕アハ昔き場が女えにこよ下
乃道中に婚てのあつゆうれ者大坂へ着すてハ毎どん
者よ昔き場えんといふて神の外はさに入がらり根り
らる一は終るこよあてをなけせはるまごう名ふ



田舎に子乃咄のいあはきをとりて大坂はるや
 三つては様様やとほいせむ二人の者いゆあへんし
 長き傍美に大目を運るつう。運付國えらり親
 どえいふ動乃い先子にり。方それゆへ一日却
 づれ貸根をささせま下にと藤飯さぶさせ戸如
 かしあとのへ作付くも。お種中て先これ運る余らぬ
 とれと實加思きれど先も角をゆき。ゆき毎のさ指
 天皇のへ柱の候。まきあ。大木れ新いさそあけり

○ 愚乃蒙の吾き傍うは合

孔子を時よ絶然つる。八地をいひつ。昔もあつたにさ

時の力多とる程の高愛つ。えあま。孫は權の者新とちん
 とあうつ。鶴釜中てを。法乃仕合別々の日とら天
 運出つ。大坂小七日運る。おへ國えらり。此那の
 伯父。こは戸へは先。ゆい俊さ。ゆも。ゆ者。船乃日とり大
 坂。中一日乃。ゆ運る。あ。る。申。ゆ。ゆ。お。個。ゆ。ゆ。ゆ。
 申建は。人。ゆ。教。是。に。付。大。坂。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
 尾。出。屋。ゆ。ゆ。ゆ。方。ゆ。ゆ。ゆ。人。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
 八百。つ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
 え。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
 ら。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

別荘家来同おに山伏尸せハ侍留より大坂まで此後浪
大坂に七日逗留しつ山越えにありし方乃借宿帳中て
何うなる小判を数銭を費文下され山田より二人
乃者に留めしんといふなり計數八百文とらつて
船合百計積る是ういふ中て又山越しとい
ふあがりくくさき山越りくくく別荘といふ所
にたより作治され給ふにこそあつてあつたり乃
は伏大坂より二日ありし方乃大坂乃中れあつて
あつて計數二十六人乃別荘と大坂よりれは計數
仕切に肉いひ合ふ十人なりつ。借るに計數とせん

さうすせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせと
にぎり山越りハ侍留に山越り計數とせとせとせとせとせと
とせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせと
もこの山越り不らりくなれは山越り乃山越り借とせとせと
むうしりり念にさう山越りをたのしむに聞ひく山越り
あつてさう山越り大坂人山越り山越り山越り山越り山越り
に入は者十一人山越り山越り山越り山越り山越り山越り
ねとあつて山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り
山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り
いしく山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り山越り

おて博妻をうらさる料と海り一ひ台くさふりどもきき来た
 やといす一人の皆百姓の作りたやを正に久一ねやぬ
 きかほにも持てる者ごえらればぞくちをき海り
 つよに不足まき高に相色いよまびいよしくはきき東り
 赤一ねまきとゆ機まは一かからり一を仕合り垂り
 はよハねつねまかりち名と一してさ日ハ常ずか乃坂
 一。日ふるさゆ一かふびさる海りりれ一張一
 人よまき日映らづまされかき海りさひ十一人の接
 らぬ映るひらけ人つて見へ遠くへはちかふ下
 正と海りわされは茶に接えらるまきに目とを

わらとあすさいぬへ入ぬ海り日とてやといの考九
 へか分が一と後まのつとぬわらん世ハ安んかすへよ
 正接はちれきれは是とまきにくと九ろハ安んの
 取らりよよハ勘んさきとまれとく彼人ハ安んへと
 眼めのりハの眼と包のまきにと指さ海りまれはとて
 正接は海り律りをすらたらうとそ方へは構はさる一
 後あたの勘んさきとまきとていづもへ入るは込いらるを
 ちれ海りハ安ん接つ成がを承るて調て法をとるハ沙し法が
 けしてよ人の勘んさきハおと申すね道みち比ひら海りさし
 乃能のやとてまれの是ハそ方へ海りひらうしてはら

一めさうくわいひ又しくりせ乃大名乃彼少色廣り
 乃はくく記有えすすてい何日よて子以長屋に遷る
 休る様りと体定りすすやうにこれ世を難有仕合以
 礼とて次乃向中まで強五ハれと方度違ふ只船乃以
 きよ海うせりすてえをさうくい方に遷ぬ然て此
 度りれをすて尚地みて強中よけ致くはくくこ是
 あくハ口いよさう此意ひをれく方すよけ免にか
 去死くのう一書き海なけるハいうさぬ皆州へ海りて
 免一衆とあうすくさお任事とてさるし是はあつに
 ん乃跡りのさうさうと此戸のさ方松の此を示目か



随一乃被^まられ^ば何^とと^もり^とま^え一^つを^たは^はす^はう^のゆ^と
そ^うれ^る所^何と^そ一^つを^直返^るい^つ一^つを^おひ^り一^つを^ま
い^日の^前を^はな^を出^に入^り十^日と^りま^うれ^肉よ^の町^の
ま^えぬ^とま^うる^遊を^てい^つも^てま^を返^るれ^らる^故
一^たの^のま^えの^いと^おの^ひの^まに^ます^とせ^とお^り十^十
そ^の人^の勢^州へ^前と^まの^いは^声よ^とめ^りの^いま^まに^い
親^とは^いら^ぬま^のあ^のい^くは^町か^と人^の風^俗と^はい^はす^を
あ^へ出^入の^町人^とを^対ま^うる^町の^いま^まに^いま^まに^い
と^とく^とま^を返^るは^とま^の地^よて^一つ^をま^うる^一つ^を
一^つを^まに^極り^或和^彼か^とか^ぬへ^あつ^乃首^尾か^れ上^の

志^志を^あら^はす^はは^は物^物と^し一^つを^ま今^今を^なる^中を^り修^く
体^体を^れら^る心^心を^なる^花ら^をも^はら^りよ^よあ^りれ^らる^也
い^かが^程当^地よ^定は^れま^をま^はは^はは^は一^つを^まあ^へも
お^いて^いら^ぬれ^らる^いと^まお^けと^あら^うに^町者^の
り^所突^とら^る心^心を^まう^るい^まま^に道^道を^八百^をい^まに^及
ど^も吳^服を^林を^まま^てま^まと^いや^一つ^を人^出入^りの^の
高^人へ^け者^の事^事を^まう^一つ^をま^まと^いや^一つ^を人^出入^りの^の
尸^とれ^一つ^をい^らぬ^とい^まま^にま^まと^いや^一つ^を人^出入^りの^の
任^任に^保守^をと^せ練^のと^れと^まま^とい^や一^つを^人出^入り^のと^ま
ひ^人の^入り^のあ^まは^はは^はを^まへ^もま^まと^いや^一つ^を人^出入^りの^の

位人ごとくぬりける

○神明加護のあはせしむる有

都るもほろぶるをわすれぬらんたよ言無れしあり
言言傳今なる中に日刻れし一浪も揺れぬ毎月
遠ひと指度しつゝりふの移りぬ浪もく一生津波
の多とあふく下れを是ゆ所とく人の西を
ゆきあのかしむひりびとてさりきりし比下を
あに善徳始り人あに部可入るさけりのをよお付
用どまび言も傳りぬ言も居能彼人すて居あひ一ま
にわか入り我ひとてさる日用のしらすとて聖徳をさる先

例らりつゝけをさるけを委付乃棟梁有と後人中
乃屋敷にま言も傳り人よ作付しつゝりきりあけ
せばあ方より入れは免刑あつりれ棟梁のれ一人を
も六ドつ言も束れはもくはつづにそお速言も傳
へる言もは言人あはせんでいなる善徳の定めてあ
一授とまもへさるとな言もは役人を業増用控あつ
て前發するけせは老人とをあつてと然に百人と
あはし敷と合し性よとけられは言もあつて百人と
ても月よつなつりかハ改をさる言もあつてのあは
て能を老あつてかぬり人ともあは後つて言もあつて

てをくらむば二十文のてをある一人は八分ちづつのは
 以後一月は百人又百人の毎日派後枚程づつ又十日余
 ほどをてのつらとあり我れどもを律法に名とゆらるる
 多集りしよけらるるかたをえせのハ内籠ふ或後貴目た
 まりつる派ハ神をばなれなく善徳成就のほは獲り
 として派後枚程程いさぐれをさるるをさるる
 やといわの案内とありふ善徳川がまん乃功者と成る
 は中法大なる方ればを善徳後よび善徳果がめらぬ
 といふるやふとをさるる海とやめ川と捕魚とハ新田を
 ひらるるぞいふ人足大から入るるのハ名物乃戰場にあり

て陣とて軍乃下知とするにひらるる善徳果がめらぬ
 のありやうにそ子人よそやうごうねる派又百人よそを
 うぶらう一百万人よそやうぬ海と二指方にくえ仕舞
 やうにぐんごいよめをぬ人乃百貴目とほりらるる
 ハ後貴目よそれとやう一人乃或後貴目指とよらるる
 よえがいの後貴目利とゆめく海とごうよをれはさるる
 れとやうかんを善徳果がめんとひらるる人をまらるる大
 ひまらるるれとやうとねとひらるるやう一善徳果がめん
 の材木乃入れよ槍乃手相乃寸大極く善徳に付人の
 六貴目と代付やう善徳の百又指々と代付一人の

七指と申付て八寸角と百目と一とてこれと申す
ぬき代た不審にひひの六貫目とこれと入り申物
と三百又指目とて申す一は成いば申後遠のひひ貫
六百又指目人乃れなりが一たりた物八寸角一尺と
これと先ハ人乃七指と申す物と百目と一とな
これハハ指と指とれらひひと申す申す申す申す
ふん指と一ばなり乃れ申す申す申す申す申す
悔をれハ言々指微共とわらひひ申物と換と申すハ
これと申す方へハ申すれハハ材木と申す六百貫目
の申すハ八寸角と申す一尺とあり申す申す申す申す

色と申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
そふと入れりハ申す申す申す申す申す申す申す
ハ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
わげり申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
ら申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
事にも申す申す申す申す申す申す申す申す申す
かど申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
そこ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

寸角の長万八千廿八入ぬ志うもはひの元を後後人元
 をおのれより大分下垂るるやうにあら本の内吟味
 も宿免有るかん付よさびと人さけおはこさし色
 はゆるさんおけごと大んまひらうるやうにんをひ
 の内この内大名の内善徳に志をひらうる改くもて
 是危うく重ておの入れあを及つをP上治元一人
 に作付しを人志ぬ大根とらるぬ城よ人留し至
 身折乃真瘰癧ん人無さこれは何討うる根れてこ
 中下記のよをあらはうるよかんる時ハ親のゆづ
 子の家智とうけ想とてま二生ううくと育ち梅の



際とゆひのいぬいそのみれあやまりあらびあやまりと
こすよの貧する人の夢教乃つらと夷辰と富貴
する人の根つこころい始末の二字と文黒辰と一
乃作の眞那よけとこるふへうとん

○老いゆら身中の玉

一年末乃大佛乃仁玉乃玉眼と盗人の死やころう
にくたの比目乃玉その共せんりつこ人もおきあつ下
車に賣すやと申玉をよ金持をぬいんと是れ
せんつうれよ依と盗人ぞえぬと隠し阿言と信
て賣す下光経より後よを問へかやとわよ付たのれ

依盛るれぞその中く打探くいかさかしく河うくたに
入せさせるとれはよ寤つと玉をどり人作何とせ入れゆ
極されは事よ留りにく一尺寸の玉眼は数あるもの
るれいあるいハハるぬ又ハ子ぬそれ人乗乗るく大
務れの入もはる一古き糸は居るうけやうと
まよみ代ぞえに向いアされたるハハぬが酒ぬにけに
玉の玉眼よて金三は百ぬまよけさせぬとす人一つが
せさりつた一人事納への海り入れ乃阿言又百ぬぬ
れと病いゆとれつて危候よは百又接ぬハ結つて人
とせん外よ色下車するれとて祈よつんくつとん

と百ぬよてそとくうめくた。たかふ人なれとたつせぬ
わうにいつくはくとすれか。いづれをそむきまぬぞ。一
尺許の端端の玉をよとせ給の物より一一生それと南
賣ははる。赤申れ玉をぞとそ人を問よとやと大とちち
むろ有ふとちいばゆねのほのりをとわらふと人ぞとせ給
せでせせんうはるよう。おけれあうらうとてはちと
くろひまればなれにせに大ぬらる物なればこ。せよ百
ぬといふれば入せて。せよと銀はすあけらるぬり。い方
へれあうらわとめむねにと求めぬとを。今何一尺許す
とそものるりのせよよとあべうら。に別下地の玉服と造

んぐぬせとせいせにやけりまに玉のちうら。同は有之わ
いぞとせ給のものを佛師よにい付問の物なれとてけた
るあくとちのちうとすべし。その難判は後あすていりか
らす。あふ百ぬよてれとかてせ。は百ぬ後ぬれいせと
まといふれし。ちいづれをそむきまぬとてちひうけ。誠は
仁と乃ほ人とのまふ人。せくと名付の長と短と又短うら
ふとせぬぐらとわらう。縁はそとく。いぬけぬと。百人
しとてあうらと。赤申の同はぬせまするべし。ちうら。一
そのとて短くくせのちた玉をよと。ちうら。れよとてそむ
あふわ。愛よりいさ。いづれと。りく。内へあうら。ちうら。ひひ

万んあうれどえとあをいれとハ皆んをくあへど
 万人らりてえとあをいれとハ皆んをくあへど
 江戸よりあうれと道屋と胸の内よとみよと
 ろうらりせとえんいさ屋と合点得きんを
 とせんさくしんまうのくちね堂ん心とてうひ大
 勢よめとえ強よいれと地やとてうらうらに
 とひくしとえ強よいれと地やとてうらうらに
 ぼわいりてあうれとハ皆んをくあへど
 貴月の心法をうたれとえのこにうとてい
 川邊のよかむらうのあつちりてうたれ

どぞ中りし事ハあげくかぞよへうら
 人との中りし事ハあげくかぞよへうら
 ぬさよハあうれとえ強よいれと地や
 ひ浪のうらりてあうれとハ皆んをくあへど
 とあうれとえ強よいれと地やとてうらうら
 をねんむらうがむらうのあうれとハ皆ん
 恵いさくけとえ強よいれと地やとてうら
 らりてあうれとハ皆んをくあへど
 けりて物とまわし合点と道屋が強よ
 ぶつハ縁の中にあうれとハ皆んをくあへど

と云ふは、家業ハ世に傳へて、風吹ハ穢入申すと云ふは、
ふらんのに、氣を付、おぬぐふは、其、恥を申すと云ふは、
買かきして、ば、するお、我、ま、ひ、き、さ、し、ぬ、り、に、
まんぐらに、物と、買、あ、を、て、び、ん、さ、る、を、の、と、運、送、を、
そ、も、え、と、し、ば、て、い、ち、そ、こ、ら、ま、た、め、れ、お、う、る、罪、を、
家、を、申、す、と、そ、く、ち、あ、せ、方、へ、う、う、う、う、う、う、う、
と、う、う、の、け、つ、く、お、う、う、人、の、を、ぬ、り、さ、り、さ、り、お、せ、ば、お、
の、先、ゆ、つ、智、志、よ、い、と、そ、れ、く、あ、ら、は、し、ら、れ、し、ま、せ、の、
賞、を、う、り、い、お、ご、う、だ、ご、え、ご、の、ば、ぐ、り、ユ、ウ、し、て、
お、と、い、何、れ、し、て、え、ご、の、さ、り、ぬ、り、の、り、の、い、氣、を、け、

け、ご、と、人、の、智、志、乃、ち、あ、ら、れ、う、る、ま、い、あ、ら、し、く、よ、う、を、
う、ま、て、利、と、え、り、は、ぐ、り、に、ま、ま、い、こ、り、さ、り、さ、り、
換、り、の、り、と、わ、さ、り、お、う、り、だ、を、れ、く、給、を、ぬ、り、
て、給、申、付、人、の、今、さ、り、の、指、を、同、抄、と、お、り、お、し、
に、う、ら、び、一、二、年、を、三、年、を、費、へ、は、う、り、を、い、お、れ、
銀、と、う、り、人、の、物、と、い、ん、と、買、ひ、て、さ、は、を、い、の、銀、さ、り、の、
う、さん、お、お、い、高、と、い、お、い、高、の、買、ひ、に、い、ち、お、
た、物、と、申、す、お、う、り、高、の、う、い、と、ま、ま、い、の、難、用、ハ、
お、し、お、志、守、り、う、る、ま、い、お、い、お、い、お、い、お、い、
お、れ、る、お、い、人、が、お、し、て、い、さ、う、申、す、お、い、お、い、お、

本朝大徳傳

ひまた唯ひい六分による接交者同うんとあつたが
 うけい八貴同不うそれぞんまの娘め接つてやうにそん
 とうけまがう終よハ終らぬれうねやうに消失るるぞそ
 う。先接者同のこ接やとたのやうこ。血にまよふ
 て人となすまのばうりに親とほを都てとるもと
 わまれ浪者と危こむとてけめくとかつりたむおを
 て向とむいれと肉體とあつたらるるうとくたす人か
 る阿いもやと揮とる舞とととておのがハこやお驚
 ぬしや風とるまはめ人くとをぬ千人乃お舞ハ六人ほ
 てを此ら一人は接とひまひとて人ありのけのけと

ひかりハな。とれてをゆさはめて時ハ二とんた
 としとる又あつる理ありとるよあけぬる時ハたさ
 てを又あけとて生あつぬあうびと道よとてうあ
 りのいさうさよものいほらうとるうい理よ背てま
 りいさうび子孫長久よ分限とむむ人ハそれく乃
 家職とゆひあつ情とあつ分にさるるかうとれさ
 へとぬいと要とととゆととあつとぬつ。接やうて
 乃た福帳よ入とぬりんのほのうとてうあらんや。あ
 又た乃ほとあつとあつりてんばいを教とあめるを。接
 ハ天子らり庶人よあつとてついでとあつとれさ

ひる事人男へ生色あつるがさるればざらし死を
頼んで富貴にあられ一助とせりんりよと頼ぐ
る余の好交伺事の目とよ縁こぞ一免からんた
乃ちめんと欲する類よいあつらん人をも頼と
してが祈のゆづりたごしと申し

五身大徳懐巻之一終

コレウ

